

保育者養成学生の体験型学習による学習効果について

－学童保育施設への見学を通して－

Study on Learning Effects Obtained through Modeling Learning by Childcare Training Students － Through at Tour of School Childcare －

坂本 大輔¹⁾

上村 裕樹²⁾

Daisuke SAKAMOTO

Hiroki UEMURA

社会福祉法人島光会¹⁾

帯广大谷短期大学²⁾

要旨

本研究は、保育士や幼稚園教諭が学童保育施設で働く職員として中心となっているにも関わらず、養成段階において学生は、学童保育施設に対して実習や見学などの体験的な学習の機会が十分設けられておらず、職業イメージを十分持たぬまま就労へと繋がるという現状に課題を持ち、子どもの生活を支える学童保育施設において、職員として働くために必要な職業イメージを抱けるよう、7名の学生を対象に体験型学習の機会を設け、その効果について、研究を行った。見学前後において自由記述での質問紙調査を行い、記述された内容の変化について質的手法により分析を行った。その結果、見学前と後において、記述量では記述語数が増加し、記述内容も職員や子どもの具体的な姿が捉えられ、職員の役割や意義、子どもとの関わり方に関する記述が内容として示される変化が見られた。見学という体験を通し、学童保育施設職員の働き方をモデルとした学習が図られたと考える。

キーワード：学童保育・体験型学習・質的分析

I はじめに

学童保育は、2012年8月に成立した「子ども・子育て支援法」により、市町村が行なう「地域子ども・子育て支援事業」として位置づけられ、大きく変化することとなった。市町村において学童保育の整備計画を策定することが義務づけられ、省令により定められた基準に基づき2014年度中に市町村が条例により独自の基準を策定する必要性が生じた。また、児童福祉法改正により対象児童が6年生までを含む「小学生」に引き上げられ、これまでの「おおむね10歳未満」から対象児童が拡大することとなった。

このような変化は、これまでの学童保育の現状を大きく変化させることとなり、実際に子どもに対して支援を行なう学童保育施設においては、これまでの取組みを踏まえ、新たな仕組みの下での学童

保育施設の運営が求められている。

学童保育は、近年の女性の社会進出に伴う共働き家庭の増加や核家族化の進行により、学校外における児童の教育の受け皿としての需要が高まり、放課後児童健全育成事業を行う事業として整備が進められてきた。その名称は、児童クラブや子どもクラブ、学童保育クラブなど様々異なる。

全国学童保育連絡協議会（2013）によると、学童保育とは、「共働きやひとり親家庭の子どもの放課後と、長期休業期間の生活を守り、それを通して働く親の権利と家族の生活を守るもの」とされる。つまり、学校と家庭をつなぐ生活の場としての役割を持つと同時に、家庭における生活環境の安定を支える場であるといえる。

学童保育は、これまで先行研究において、その課題として「量的拡大と質的拡充」や「指導員の専門性」、「指導員の勤務・雇用」、「指導員の負担」などが、常に指摘されてきた（平田：2007、村井：2007、藤田ら：2011、上村ら：2013）。しかし、子ども・子育て支援新制度において、地域子ども・子育て支援事業として、学童保育の社会的なニーズを受け、制度化についての検討がなされ、法改正に伴い最低基準が作られたことで、現在これらの課題を解決するための取り組みがなされている。学童保育の受入人数の拡充に伴う量的拡大と保育内容の質的向上はもちろんのこと、特に、人的資源である指導員に関しては、その量的拡充と専門性の担保、雇用環境の整備など喫緊の課題として取り組みがなされている現状である。このような取り組みは、子どもと家庭を直接的に支えるという学童保育の更なる安定へと繋がり、果たす役割は非常に大きいといえる。

各自治体によりその基準の差はあるが、保育士や幼稚園教諭は、学童保育指導員の該当資格として中心に置かれる資格および免許であるといえ、保育士および幼稚園教諭の養成施設を卒業した学生にとっての就職の場となっている。そのため、保育士および幼稚園教諭の養成施設では、授業を通して、学童保育施設に関する学習を行っており、学童保育施設での指導員として専門性を担保することができるよう教育内容の検討がなされている。しかしながら、学童保育施設は、保育所や幼稚園、認定こども園、児童福祉施設等とは異なり、実習対象施設とはなっておらず、学生にとって体験的なイメージを持っているとは言い難い状況にある。特に基礎的学習の時期である1年次の学生においては、施設に対する十分な理解が得られているとは言い難く、解決すべき課題であると考え。そのため、このような現状に関する課題を把握し、その解決を図るための方法として、本研究では、対象は少人数であったが、学生の学童保育施設での体験型学習の機会を設けた。そして、その体験型学習を通して、学生の理解がどのように変化したか、また、どのようなことを学ぶことが出来たかについて、分析することとした。

II 方法

1、対象

保育士資格および幼稚園教諭免許の取得を目指す養成段階にある学生で、A研究室に所属する1年生ゼミナール学生7名（見学当日は、1名が体調不良による欠席のため6名の参加であった）を対象とした。

2、期間

2016年12月

3、手続き

(1) 見学前

学童保育施設見学にあたって、正課講義時間外で、学童保育施設に関する60分程度の講義を実施した。

その講義においては、子ども・子育て支援新制度や放課後児童健全育成事業に関する概要と、学童保育施設の仕組みについて、説明を行った。また、講義の実施前に、学童保育に対するイメージについて、対象学生から自由記述による回答を求めた。記述方法や記述内容等は、一切指示せず、学童保育施設に対する現在の学生自身が抱くイメージについて、記載を求めた。

(2) 見学

学童保育施設での見学は、2016年12月に午後13時頃より15時半頃までの2時間半程度の時間を設け、見学施設の協力の下、行った。

見学時のスケジュールとしては、13時頃より1時間程度の時間を、施設主任より保育施設に関しての見学と説明、対象学生からの質疑応答を行った。その後、学童保育施設の利用児童が順次登所してくるため、1時間強程度の時間であるが、利用児童と一緒に遊び、活動する時間とした。15時10分過ぎ頃からおやつ準備が始まるため、その時間に合わせて、子どもとの関わりを終え、再度施設主任との質疑応答の時間とした。

訪問先となる学童保育施設は、公立から民間へと事業者運営委託がなされて2年目の運営となる施設である。運営委託の際に、施設の建て替えを行っており、定員数規模に対して、施設面積は広く、ゆったりとした空間で子どもが過ごす事ができるよう配慮された開放的な施設づくりがなされていた。

(3) 見学後

後日、ゼミナールにおいて、見学についての感想や気づきを参加学生同士で対話により共有した。その後、見学を終えて自身の学童保育施設に対するイメージが、どのように変化したかを自由記述にて回答を求めた。また、学童保育施設で働く職員に対する対象学生の感想についても自由記述にて回答を求めた。見学前の記載方法と同様に、記述方法や記述内容等は、一切指示せず、学童保育施設に対する現在の学生自身が抱くイメージについて、記載を求めた。記載終了後、記載内容に関して、学生同士で報告と共有を行い、自らの自由記述内容について、より詳細な検討を行った。

4、分析

学童保育施設に対して、対象学生が抱く、見学前と見学後のイメージの変化について、対象学生の自由記述をもとに分析を行った。また、見学を通して、学童保育施設の職員に対して感じた感想について、自由記述を対象に分析を行い、保育者としての学童保育施設職員への職業イメージを示すこととした。

分析方法は、質的分析の手法を用い、対象となる自由記述について文意により拡散し、レコード化を図り、記述内容に関しての分析を行った。その他、記載内容に対する学生自身の報告をもとに、記述されている言葉の補完を行い、記述された言葉のイメージを更に具体化することとした。

Ⅲ 結果

1、見学前

対象学生の学童保育施設に対する見学前のイメージについて、自由記述の記載内容をみると、以下のような回答が示された。

「小学校の子どもが学校終わりに遊ぶ場所」「学校が終わって、友達とまだ遊べる場所」「家の近くにも学童があるが、ただ遊んで帰って行く場所」といった子どもが学校帰りに行き、遊ぶための場所として認識していることが示された。

「全く無縁だったので少し憧れが合った場所」「学校が終わったら行く子もいるが、自分には行かない場所」といった、自分には行ったことが無く、自分にとっては関係がない場所として認識していることが示された。

「親の仕事が忙しい子どもが預けられる場所」「学校帰りに子どもがもう一つの家として帰って行く場所」といった、子どもにとって保育が行われるもう一つの生活の場として認識していることが示された。

「季節ごとにも行事などたまにやっている」「学校が終わったら行く場所で宿題とかやってそうな場所」といった、学童保育施設で行われている活動に関して、集団生活として行事などを取り組んでいる、勉強をしているといった、イメージを有していることが示された。

「小学生の子たちが遊ぶための場所で保育士は関係ない」といった、小学生を対象とする施設のため、主に乳幼児を扱うことが多い、保育者には関係することが無い施設として認識していることが示された。

「小学校と学童保育施設は、別々で独立しているもの」「中で何をしているのかわからない周囲から独立している場所」といった学童保育施設が周囲と独立した形で存在している施設という認識を示していることが示された。

講義中での学習やこれまでの対象学生自身の経験から学童保育施設は、保育を必要とする小学生が学校終了後に通う施設であることを理解しており、子どもにとっての生活の場となることも理解している様子が示された。その一方で、学童保育施設の指導員として保育者が重要な役割を担う者であるという理解は弱く、学童保育施設に自らが通った経験が無いこともイメージに対して影響を及ぼしているものと思われるが、自分にはあまり関係が無い、疎遠な場所として学童保育施設を認識している様子が、対象学生の回答から考えられた。

2. 見学後

(1) 学童保育施設に対するイメージ

学童保育施設の見学を終えて、対象学生の学童保育施設に対するイメージは、自由記述の記載内容から以下のような回答が示された。

「小さな子どもと関わるから怪我をしないように、危なくないようにしなくてはならないと思い込んでいたが、自分が楽しみながら、子どもと同じ目線で関わることができ、持っていたイメージが変わった」「過ごしやすい生活空間に、子どもの楽しそうな元気いっばいの声があって、その中で一緒に遊んだりしている自分もとても楽しい気分になれた。子どもの感情が学童内の雰囲気をつくっていることに気がついた」といった、子どもとの関わりを通して、小学生の子どもの姿や遊びの様子に触れることが出来、子どもが生活の中で感じる感情が、学童保育施設の雰囲気や様子を作るといった、子どもと環境との往還的な関わりによる環境の構成について、体験的な理解が深まった様子がみられた。

「学童は小学生が自由に行って遊ぶことのできるだけの場所だと勝手にイメージしていたが、小学校と同じくらい子どもにとって学ぶことがたくさんある場所だと感じた」「小学生になると、遊びも自分たちで完成していっているように思えた」といった、学童保育施設が子どもにとって放課後の時間をただ過ごし消化するだけの場所ではなく、例えば子ども同士で遊びを考え、作っていく関わりを通して、人間関係を学ぶといった、子ども自らの遊びを通した学びの場所としての役割を担っていることについて理解した様子が示された。

「学童に保育士が関わることができるとは思ってもいなかったのが、驚きであった」といった、学童保育施設の職員の資格に関しての理解が深まった様子が示された。

「学童保育は、子どもにとってのもう1つの家であり、心の休める場所であると思った」「子どもにとっての癒やしのような安心できるものや居場所として、とても心強いと思った」「子どものただいまに対して職員がおかえりと言っていて家のような雰囲気伝わってきた。漫画を読んだりする場所や遊んだりできる広い場所、みんなが集まってくつろいでいられる場所があって、子どもが快適に過ごせる場所だと思った。そのため、学童保育施設が家というのが伝わってきた。子どもが安心して過ごせる場所を自分も作っていけるようにしたい」「自分の家のように子どもが過ごせるように職員が気を配っており、アットホームな空間になっていた」といった、学童保育施設が子どもにとって安心、安全な場所としてくつろぎ過ごすことのできる場になっているといった回答が示された。子どもが安心し、くつろぎながら過ごすことのできる場所が存在することは、子どもにとって重要であり、第2の家として学童保育施設が存在できるよう、その雰囲気を作るために職員が機能していることなどの理解が深まった様子が示された。

「宿題をやる時もあるが、基本的には子どもが自由な遊びをする空間になっており、自分がこれまでに思っていたよりも自由に過ごすことができることに驚いた」といった子どもが主体的に遊び、活動し、学童保育施設で過ごす姿を目の当たりにし、学童保育施設での子どもの生活の様子について、理解した様子が示された。

「小学校との連携が難しいという話を聞いていたが、その実際の姿をみて現状を目の当たりにした」といった、学童保育施設と小学校との連携の課題について、理解した様子が示された。これは、学校において友人関係との課題を抱えた子どもへの支援を学童保育施設職員が行っており、その具体的な様子や経緯、経過について、学校側からの説明を十分に受ける事が出来なく、学校の問題は学校の問題、学童の問題は学童の問題というスタンスを、学校側より学童保育施設が連絡を受けた場面と、見学の当日が重なってしまい、そのやり取りの様子と子どもへの対応の姿を対象学生が目撃したため、示された回答であると思われる。必ずしも全ての学童保育施設と小学校との関係がこのような状態ではなく、現在は、連携の体制をいかに構築し、実際的にどのように動かすかを課題として取り組み、連携を図っている施設の方が多い。しかしながら、学童保育施設と小学校との連携が全ての施設で上手く機能しているわけではないため、一つの実践的な場面として小学校との連携課題に対する理解が深まった様子が示されたと考える。

「子どもからまた来てね。絶対来てね。月に一回は来てよと言われ、とてもうれしく、また学童保育にいつか来たい」といった、学童保育施設と今後も関わりを持ちたいと思う回答も示された。

(2) 職員に対する感想

見学を通して、学童保育施設の職員に対してどのような感想を抱いたのか、自由記述の記載内容から以下のような回答が示された。

「職員の人の雰囲気が良かった」「職員さんたちは、とても温かく見えました」といった学童保育施設の職員の雰囲気の良いさに対する回答が示された。

「職員が子どものことを家族の一員のように関わっていた」「子どもたちはリラックスして職員と関わっており、家族のようだった」といった、子どもと職員との関係について家族のような非常に近い存在として両者の関係を捉えたといった回答が示された。

「子どもたちのことを大切にしている様子がみられた」「すごく親身で優しく子どもたちのことを一番に考えていてすごいと思った」といった、職員が子どものことを大切に、そして親身に考えている様子を感じたといった回答が示された。

「話をしてくれた方も常に笑顔で話しやすく、子どもひとり一人を見ているんだと感じました」「関わる相手が小学生なので、関わり方が子どもを大人のように尊重して、考えや意見を大切にしながら接しているようだった」といった、子ども一人ひとりの様子をしっかりと捉え理解し、考えや意見、人格を尊重しながら、関わっているという職員の姿について理解を深めた回答が示された。

「今回初めて学童に行ってみて、話を聞いてみて、学童の職員も保育士や幼稚園教諭と同じように子どもの援助を見えない所で努力を積み重ねている人だと思った」「心から楽しんで子どもと接するという心掛けが素晴らしいと思った」「学童としての子どもの関わり方のルールがあって、その中でどのように子どもが明るくいられるかをとても大切にしていることがわかった」といった、学童保育施設の職員の働き方や子どもと関わる上での心構えといった、子どもがいかにして学童というこの場所で楽しむことができるか、子どもの生活の場として子どもの発達を支えるために職員がすべき事は何かということを考え、勤めている様子について理解を深めた回答が示された。

(3) 見学による自由記述の変化

学生の学童保育施設に対して抱くイメージに関して、見学前と見学後で示された内容は、上述の通りであった。それらの記載された内容について、記述語数のカウントを行い、比較をした。その結果、記述後数が、見学前と見学後では変化している結果が示された。

見学に参加した6名の記述語数は2倍から8倍程度とそれぞれの差はあるが、全学生が増加する結果となった(表1)。

表1 記述語数の変化

	見学前	見学後		見学前	見学後
学生 A	51	203	学生 D	76	180
学生 B	74	158	学生 E	25	212
学生 C	38	107	学生 F	47	128

IV 考察

これらの結果から、学童保育施設への見学を通して、学生の学びが変化した様子が示されたと考える。見学前の記述をみると、子どもが放課後に保護者の仕事などを理由として行く所といった、単純な学童保育施設という場所の仕組みについての記述がほとんどであった。学生同士の対話の中で述べ

られていたことであるが、講義を通して学童保育施設の概要について学んでいたため、学童保育施設の設置の理由や施設を利用する子どもについて理解をしていたが、学童保育施設を利用したことや見学したこと、ボランティア等に参加したことが一度も無かったため、学童保育施設という施設として存在している場所であり、自分にとって関係が無い場所という認識であったことが理由であると考えられる。しかし、見学を終えた後での記述は、内容もより具体的で、学童保育施設の職員に関する記述や子どもの実際の姿に関する記述、学童保育施設の役割と意義に関わる記述へと変化する結果となった。また、見学前と見学後の記述に関しても対象となる全学生の記述語数が増加する結果が示された。

これは、約2時間半という短い時間ではあったが、学童保育施設で職員から直接話しを伺い、そこで生活する子どもの姿を見学し、直接関わったことで、学生にとって学童保育施設が身近な場所となったためであろう。見学を通して、学童保育施設の具体的な姿、つまり、学童保育施設での生活の様子、職員の働き方や子どもに対する関わり方、子どもの遊びの姿と活動の内容、子ども同士の人間関係、学童保育施設と外部資源との関わりなどに、短時間であったが直接的に触れたことで、学生の学びへとつながり、理解が深まったためと考えられる。体験を通じた具体的な学びが獲得された結果であるといえるであろう。

様々な経験や体験により得られる学習は、モデリング学習と呼ばれ、特に専門的スキルの習得においては効果的な学習手法（張：2014）であるとされる。

一般的に熟練者はどのような状況においても適切かつ迅速な行動が可能であり、経験したことの無い事態や想定外の状況への対処が可能である。これは知識や経験から行動モデルが構築されているためであり、熟練者はこのモデルを作り上げるための能力を獲得している（鍋田ら：2011）。しかしながら、非熟練者はこのようなモデルを獲得しておらず、適切かつ迅速な行動を取ることが難しい。これらを身につけるためにも、熟練者の行動を模倣し、分析し、判断し、知識や経験として獲得していくといったプロセスが専門的スキル習得においては、必要な学習方法となる。

今回の見学を通して、学生は、学童保育施設における職員の子どもに対する関わりや支援をみることが出来た。その体験から、その行動を模倣し、自らに取り入れ、子どもと関わりをもつことで、学童保育施設の職員の機能や役割について学びを深めることが出来た。このプロセスは、学習段階としては全くの初期の段階であり、自らのスキルとして昇華し取り込むことができるだけの学習準備が図られている状態でないため、専門性獲得の学習ということは難しいが、体験を通して、学生の学びが深まり、その理解や認識が大きく変化したということが出来るであろう。

V まとめ

本研究の結果より、学生の理解が見学を通して前後において変化することとなり、体験的な学習による学びの効果として、ある程度示されたと考える。

これまで全く関わりが無く、学童保育施設の職員や子どもに関して理解が十分ではなかった学生が、短時間ではあるが見学という体験を通じ、学童保育施設に対してその機能や役割、意義といったことに対して理解を示す結果が、学生の自由記述、および学生同士の振り返りでの対話において示された。これは、見学という体験的学習の中で、熟練者である学童保育施設職員の働き方をモデルとして、自

らが熟練者の行動を模倣し、分析し、判断し、知識や経験として獲得していくことで、学童保育施設の現状とその機能について、理解が図られた結果であると考えられる。

現在、学童保育施設は、子ども・子育て支援新制度施行後、対象が拡大されるとともに、その役割に関して質的向上への期待も大きい施設である。しかしながら、環境整備の見通しが未だ十分ではなく、運営に関する最低基準がある程度策定されているにも関わらず、人的整備に関する処遇改善の見通しが十分立っているとはいえない。入所児童に対する絶対的な量が不足しており、全国学童保育連絡協議会によると、高学年の入所児童数も10年前と比較し伸びている状況である。また、入所を希望する子どもの数も増えており、これは今後も増加が予想されている。このことから、学童保育所が求められているニーズは高く、その役割は今後も更に拡大していくことが予想され、学童保育施設において働く職員の充足も必要となるであろう。そのため、上述した課題について、早急に解決に向けた取組みを市町村と連携を図り進めていくことが必要となる。

今後は、学童保育施設で勤務する保育士や幼稚園教諭を養成する養成施設において、学童保育施設職員として必要となる知識や技術に関して十分な指導が可能となるよう教育プログラムの検討を行い、本研究の結果において示された体験型学習の効果を加味し、そのような機会を教育内容に取り入れていく教育プログラムの改善を、学童保育施設と連携しながら進めていく必要があると考える。

文献

上村裕樹・坂本大輔・伊勢正明：学童保育における指導員の困難性に関する研究－学童保育所指導員を対象とした質問紙調査の結果から－、帯広大谷短期大学紀要、50、59-68、2013.

全国学童保育所連絡協議会：学童保育の実施状況調査結果、1-16、厚生労働省、2013.

張明涛；モデリング学習とコンピテンシーの習得, 経営行動科学学会年次大会発表論文集, 17, 280-285、2014.

鍋田真一・横山航・山本洗希・細澤あゆみ・渋谷良太・八木田知弘・小田奈緒・湯瀬裕昭・青山知靖・鈴木直義；フィジカル・アセスメントスキル習得における学習者支援へのモデリング導入の提案, 情報教育シンポジウム2011論文集, 161-168、2011.

平田貴子；わが国の学童保育の現状における一考察、川崎医療短期大学紀要、27、47-51、2007.

藤田純子・小林千尋・草野篤子；放課後における学童保育指導員の専門性と課題、湘北紀要 (32)、169-182、2011.

村井尚子；学童期における「保育」の必要性、大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要6、95-108、2007.